

観察時間は早期産児では2時間、満期産児では3時間であった。早期産児の受胎後週数別の観察回数は、33・34週7回、35・36週14回、37・38週16回であった。満期産児では各対象児とも生後0日、2日、5日の3回観察した。ただし生後5日に観察できなかった対象児が1名あった。

結 果

①早期産児 啼泣の直前の行動状態をみると、受胎後33・34週では睡眠が92.3%、まどろみが7.7%、覚醒は0.0%であるが、35・36週では睡眠20.0%、まどろみ24.0%、覚醒56.0%となり、37・38週では睡眠16.1%、まどろみ51.6%、覚醒32.3%であった。

啼泣の直後の行動状態も直前の場合と同様の傾向をみせ、33・34週では睡眠が71.4%、まどろみ28.6%、覚醒0.0%であるが、35・36週になると睡眠21.8%、まどろみ30.4%、覚醒47.8%となり、37・38週では睡眠19.6%、まどろみ

41.0%、覚醒39.4%となった。

②満期産新生児 啼泣の直前の行動状態は、生後0日では睡眠が55.6%、まどろみ18.0%、覚醒26.4%であるが、生後2日では睡眠45.3%、まどろみ18.8%、覚醒35.9%となり、生後5日には睡眠23.8%、まどろみ19.1%、覚醒57.1%となった。

啼泣の直後の行動状態も同様の傾向を示し、生後0日では睡眠53.7%、まどろみ26.9%、覚醒19.4%であるが、生後2日では睡眠33.3%、まどろみ33.3%、覚醒33.3%になり、生後5日には睡眠17.1%、まどろみ22.9%、覚醒60.0%となった。

以上のように、早期産児でも満期産新生児においても、啼泣の直前および直後の行動状態は発達につれ睡眠の占める比率が減少し、覚醒が増加する結果が示されており、「啼泣と覚醒は次第に連続性を増す」という本研究の仮説を支持する結果が得られたといえる。

「Strange Situation」における一歳児の Attachment Behavior」

繁 多 進

目 的

MAinsworthらが標準化したアタッチメントの実験的研究方法は欧米において広く用いられ、アタッチメントのパターンをA、B、Cという3群に分類する方法もすでに世界的に定着してきている。しかし、我が国においては、この方法を用いた研究がいまだなされておらず、国際的な比較が不可能な現状であるので、同一の尺度を用いて日本における乳幼児のアタッチメントの特質をさぐるため、Strange Situation を用いたアタッチメントの実験的研究を試みた。

手 続

被験者は誕生日前後一週間以内の満一歳児とその母親24組。Strange Situation は横浜国大教育学部心理学教室のプレイルームを9フィート四方にしきって設けられた。観察はOne Side mirror を通して行なわれた。2台のビデオカ

メラが用いられたが、その1台には実況放送録音を入れた。Strange Situation は母と子、母と子とStranger、子とStranger、子どもだけ、など8つのエピソードからなり、その過程でそれぞれ2回ずつの母子分離場面と母子再会場面が設定されている。

行動の分析はビデオテープを15秒インターバルでおこし、その15秒間で生じた行動をチェックするという方法で行なわれた。

結 果

(1)一般的行動分析 ①探索行動は母親在のエピソードで多く、母親不在のエピソードでは減少した。一歳児の多くが母親を“安全の基地”として使用していることを示すものと云える。②Vocalization も母親と子どもだけのエピソードで圧倒的に多かったが、それらのほとんどは母親に向けられたものではなく、独語的なものであった。

探索活動をしながらの独語的Vocalizationは母親の存在による安定感を示しているようであった。③Lookingは母親に対するものより、Strangerに対するものの方が多かった。このことはLookingという活動が接近、接触にかわるdistance interactionというばかりでなく、新奇性に対する好奇や不安を示すものと云えるのであろう。

(2)U.S.A.の資料との比較 ①strange situationへの慣れは日本の子どもの方がおそい。②日本の子どもはSmilingが少ない。③日本の子どもはStrangerに対してアメリカの子どもよりacceptableではない、などの差異がみられたが、全体としては一致点の方が多かった。

(3)Strange Situationでの行動と他の要因との関連。①家庭における母子の接触量が多い子どもはStrange Situationにおいても母親に対して接近・接触をより求め、逆に接触量の少ない子どもは回避行動が多い。②家庭で子どものVocalizationに敏感に反応する母親の子どもはStrange Situationで母親に抗議行動を示すことは少ない。③欲求即応型の授乳を受けた子どもはdistance interactionをより多く示す。④家庭でのアタッチメント行動が活発な子どもはStrange Situationでの接近、接触を求める行動が多い。⑤A群(avoidant group)は日本児の方が少なかった。

母子の分離・自立—予備観察—

依 田 明

幼児は発達にしたがって、母親との共生関係を脱し、母親から時間的にも、距離的にも離れていくことができるようにならなければならない。子どもによっては、なかなか母親から離れられず、自立的な行動ができないものもいる。

本研究の目的は、母子の分離・自立行動の発達を規定している要因を明らかにすることになる。この規定要因にはさまざまなものが関与していると予想されるが、子ども側にあるもの、母親側にあるもの、家庭全体にあるものを総合的に検討していく予定である。

本年度は、上記の研究のための予備的な調査をおこなった。

財団法人小平記念会、家庭教育研究所では、3歳児の母子を週一回来所させ、健全な母子関係を確立するために、母子教育を1年間おこなっている。来所している母子は、約80名である。10月に入園し、つぎの年の9月に終るというサイクルで、カリキュラムがつくられている。

この家庭教育研究所に来所している母子を対象に、母子の分離の状況を観察した。

朝、母子ともども来所して、すぐに母子の分離

ができ、子どもはプレイ・ルームへ、母親は母親教室へ、スムーズに行けるものは母子分離ができていると判断した。

母親と離れることができず、母親にしがみついたり、泣いたりして、プレイ・ルームにはいれないものを、分離ができていると判断した。

この両者の中間にあるもの、たとえば一度プレイ・ルームにはいりながら、しばらくすると母親を求めるもの、ある週は分離ができたが、翌週になると分離ができなくなってしまうものを不安定なものとした。

55年10月入所時では、分離ができているもの42パーセント、分離できないもの22パーセント、不安定なもの36パーセントであった。

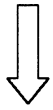
それが、4カ月たった56年1月では、それぞれ60パーセント、18パーセント、22パーセントとなった。

分離できないものは、この4カ月で4パーセントしか減少していない。

本年度は、さらにきめのこまかい調査をおこなう予定である。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



目的

M Ainsworth らが標準化したアタッチメントの実験的研究方法は欧米において広く用いられ、アタッチメントのパターンをA,B,Cという3群に分類する方法もすでに世界的に定着してきている。しかし、我が国においては、この方法を用いた研究がいまだなされておらず、国際的な比較が不可能な現状であるので、同一の尺度を用いて日本における乳幼児のアタッチメントの特質をさぐるため、Strange Situation を用いたアタッチメントの実験的研究を試みた。